
シークレット・アイ

伊勢島 綱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シークレット・アイ

【Nコード】

N5793L

【作者名】

伊勢島 綱

【あらすじ】

東京の片隅の『野依探偵事務所』。本来は探偵事務所なのだが、そこには物騒な依頼が転がり込む。果たして今回の依頼とは

プロローグ（前書き）

今回が初投稿の作品です。

稚拙なところもあると思いますが、宜しく願います。

プロローグ

東京の片隅の街、蒼海町。その中心街に『野依探偵事務所』という興信所がある。そこには様々な人々が様々な依頼を持ち込んで来る。

今日もまた、一人。

「所長の野依 雅です。要件を聞かせていただけますか？三船さん」
事務所の応接間の中央のソファーに向かい合って『野依探偵事務所』所長の野依雅は依頼人の三船と話し合っていた。

「家の近くで宗教団体が騒いでいて困っているんです。」

三船は、切実な声色で答えた。資料にあつた四十一歳という実際の年齢より年をとって見えるその外見は恐らくその宗教団体が騒ぐせいで眠れずやつれているからだろう。

「それで、私達にどうしていただきたいのでしょうか？」

雅は冷静な口調で返す。長く美しい黒髪を後ろでひとつにまとめたその姿は静かな美しさがあり、見るものを引きつける力を持っていた。

「どうする……とは？」

「その宗教団体をどうしたいかと言うことです。それと、三船さんはどのようにしてこちらにいらっしゃったのですか？」

「篠塚しのづかさんからの紹介です。団体を追い出すにはどうすればいいかと相談したところ紹介されました。荒っぽいのが確実にこなしてくださると」

雅は“篠塚”という名前を聞いて一瞬顔をしかめた。

「あの、この依頼受けて下さいますか？」

三船はそんな雅の対応を見て不安になり、そんな言葉を雅にかけ

る。

「いえ、すみません、お受けさせていただきます。料金は指定の口座に振り込むか現金でお願いします」

「ありがとうございます！それでは失礼します」

三船は安堵の色を浮かべ、礼の言葉を告げ去っていった。

三船と話しを後、雅は事務室に入り、事務員達に伝えた。

「篠塚から仕事を回された。成瀬、この宗教団体を調べといて」

「了解しました」

雅の指示に答えたのは、事務室一番手前の雅から見て右手側のパソコンに向かい合っていたセミロングの女性、成瀬 美希は雅から渡された書類を受け取り答えた。

「黒木と笠原は成瀬から情報が入り次第団体の方に張り込み」

「わかりました」

「あいよっ！」眼鏡をかけた温和な雰囲気な男、黒木 誠一とショートカットの活発な印象を受ける女性、笠原 直美が答える。

「絹見は事務所をお願い。里見も事務所待機だから戻って来たら連絡宜しく」

「はい」

この指示に応じたのはストレートロングの大人しい女性、絹見 紗織だ。

「桐原は私と篠塚の所に行くわよ。」

「りょーかい」

この指示に答えたのはござっぱりした感じの男、桐原 朋希だ。雅は事務員達に指示を出し、篠塚に会いに行くため事務所を後にした。

荒事だな、そう呟いて朋希は事務所を出た雅の後を追った。

プロローグ（後書き）

人物紹介

野依 雅のより みやび

『野依探偵事務所』所長。 24歳。

桐原 朋希きりはら ともき

同事務所調査員。 雅の秘書的役割も兼ねる。 20歳。

黒木 誠一くろぎ せいいち

同事務所調査員。 22歳。

笠原 直美かさはら なおみ

同事務所調査員。 22歳

里見 隆之さとみ たかゆき

同事務所調査員。 20歳。

成瀬 美希なるせ みき

同事務所会計士。 23歳。

絹見 紗織まきみ さおり

同事務所事務員。 19歳。

一話 探偵と弁護士

三船からの依頼を受けた野依雅が桐原朋希を連れて事務所を出た後、事務所にいる残りのメンバーも行動を開始した。

「うーん、団体自体はどこにでもある感じね」

成瀬美希はパソコンで団体宗教団体を調べ、呟く。

「どんな団体なんですか？」

美希のデスクにコーヒーを置き、絹見紗織が聞くと「聞いてもつままないけど、聞く？」

「はい、一応」

「団体名は仏見会ぶつけんかい仏教系の団体で、設立は三年前。依頼人の近くには最近引越してきたみたい」

「そうなんですか」

「ただ、ヤバい感じの話しもネットで流れてるのよ」

「と言いますと？」

「薬品で人体実験をしてるって話」

「薬品……ですか」 紗織がその言葉に顔をしかめた。

「そ、でも目的が解らないわよね。毒ガスとかなら人体実験の必要は無いしね。ま、眉唾もの話よ」

「銃の類はどうなんでしょうか？」

「まさか、十年前の神仙教しんせんの一件以来、日本で銃火器を入手するのは不可能とっていいわ。薬品もだけど」

美希はそう言うと、「はい、これ仏見会の資料。他の人に回していい」と資料の束を紗織に渡す。

「解りました」

紗織はそう言い、資料を持って、誠一と直美の所へと向かう。

「黒木さん、笠原さん、これ、成瀬さんからの資料です」

「ありがとうね、紗織さん」

「あんがとっ、紗織ちゃん！」

誠一は資料を受け取ると「行くか」と直美を促す。

「そだね」

「紗織さん、事務所のレガシイ借りてくから鍵貸して」

「どうぞ」

紗織は自分の机からレガシイの鍵を取り出し、誠一に渡す。事務所の三台のレガシイを始めとした備品は基本的に雅が不在の時は紗織が管理している。

「行って来ます」

「いつてくるよっ」

誠一と直美はそう言って、事務所を出た。

一方その頃、雅と朋希。

「機嫌悪そうですね、雅さん」

「当たり前よ。篠塚のやつ前もつての連絡無いんだもん」

顔をしかめたまま運転を行う雅の横で朋希は気まずい思いをしていた。

「いつものことでしょうよ」

「いつも連絡してって篠塚には言ってるの。簡単に受けられる仕事じゃないのよ」

「里見さん以外すぐに受けられる状態だったし、良いじゃないですか」

「タイミングの問題よ。もし依頼来たの一週間前ならアウトよ」

「もしものは嫌いなんじゃないやありませんでしたっけ？」

朋希のその言葉で雅は黙り込み、運転に集中する。

藪蛇だったな、そう心中で呟き、朋希は窓からの景色に目を移した所で車が止まった。

「さ、行くわよ」

「了解です」

雅が車を止めたのは『篠塚法律事務所』と書かれた看板を掲げる建物の駐車場であった。

「君はいつ会っても不機嫌そうな顔だな、美人が台無しだ」

篠塚武生は部屋に通された雅の不機嫌な表情を見てそう雅に語りかけた。

「篠塚さんが前もって連絡くれれば、上機嫌で美人が台無しになっ
ていない私が見れますよ」

「是非とも見てみたいが、難しい話だ。」

「電話の一つで構わないと言ってきましたか」

「こちら忙しくてね、と篠塚は言葉を返す。

「で、依頼は受けてくれるのだろうか？」

「ええ、その報告と何故私達にこの仕事を回したのかを聞きに、今日
は参らせていただきました」

「もう悟っているかと思っていきましたが」

「能力者絡みですか」

「そうゆう事ですね」

「最近多いですね。特に宗教絡みで」

「能力者の能力は奇跡のようなものだからかな。宗教屋は欲しがら
な」

端から見れば、誇大妄想狂の会話のように聞こえるこの会話だが、
篠塚達のいる部屋は人払いされており、部屋にいる朋希もこの会話
に疑問を抱く様子はなかった。

「じゃ、私は次の仕事があるので」

「そう言っつて篠塚は席を立った。

「じゃ、私達は事務所に戻りましょ。一度ミーティングを行うから
連絡宜しく」

雅もそう言っつて席を立ち、朋希を促した。結局、雅は不機嫌な表
情のままだった。

「あんま大きな施設じゃないな」

仏見会の施設の近くに来た誠一と直美は周囲を調べていた時に、誠一が呟いた。

「見た目がすべてじゃないけどねっ」

直美がそう返す。言葉は普段通りだが、周りに注意を配っている様子が雰囲気から感じ取れる。

「その通り、人間と同じだな」

誠一はそんな風に言葉を返す。彼もまた、周囲への注意を忘れてはいない。

「何も怪しい様子はないな」

「そだねっ」

二人の携帯が同時に着信音を鳴らしたのはそんな会話をしている時だった。

「今回はここまでだな」

誠一はそう言い、直美に車に戻るように促した。

二話 ミーティングとチケット（前書き）

更新遅れてすみません

次からは定期的に書けるようになりたいです

二話 ミーティングとチケット

「これから今回の依頼の件でミーティングを行います。成瀬、教団についての説明を」

野依探偵事務所の一角にある会議室ではミーティングが行われていた。この手の“普通ではない仕事”の時には危険性が高い為、事務員の安否確認も兼ねて定期的に行われる。

無論、“普通ではない仕事”はその分報酬も期待できるのだが。

「教団名は仏見会、設立は三年前ですが依頼人の近くに施設を移転したのは二ヶ月前です。他の宗教団体との対立はありませんが、インターネット上において『真夜中に仏見会の施設から儀式か何かの音に混じって小さな悲鳴が聞こえてくる』、『薬品で人体実験を行っている』などの噂があります。本当かどうかは解りません。また、今回の依頼人のケースからも明らかのように、周辺住民の印象は良くありません」

雅の言葉を受け、美希が答えた。

「次、黒木と笠原」

「施設自体はどこにでもありそうな感じですが。平日の昼間から信者の出入りがあります。恐らくは表向きは会館の類かと」

誠一が施設について答える。直美はこのような場所に馴染めないのか手持ち無沙汰に書類に目を落としていた。

「成瀬、悲鳴が聞こえるって噂の事だけど、具体的に何時頃に集中してるか解る？」

美希からの資料と誠一が作った簡単な会館の資料を見ながら雅は美希に問いかける。

「主に深夜で、特に夜の一時から二時に集中しているみたいです」

雅はその報告を受け軽く頷き、「なる程」と呟いた。

「黒木、笠原」

「はい」

「明日から仏見会に出入りする人を調べてもらえる？」

「解りました」

「あいよっ」

その時、「遅れてすみません」と挨拶して涼しげな瞳が印象的な一人の男が入ってきた。

「里見か。浮気調査の方はどうだった？」

「予想通りクロでした。これがレポートです」

そう言い、里見 隆之はレポートを雅に渡す。

「戻ってきたのはさつきよね。今やってる仕事についての概要は連絡されてる？」

「紗織から連絡貰ってます」

「解ったわ。里見、仏見会に信者のフリして内部の事情を調べてきて頂戴」

「解りました」

そう言うと思ってましたといった表情で隆之は答える。

「それじゃみんな、お願いね」

雅はそう言うってミーティングを終わらせた。

「先輩」

ミーティングを終え部屋を出た隆之に紗織が声をかける。

「どした？」

紗織はポケットに手を入れると何かを取り出そうとしたが、

「えっと、何でもありません。気をつけて下さいね」

そう言うってポケットから手を出し、後ろに回す。

「解ってるよ」

隆之はそう言うって、事務所を出る。

「紗織ちゃん。それ何？」

美希が紗織に質問する。

「な、何でもないです!」

紗織は慌てて否定するが、その様子はいかにも“何かある”と言っているようなものだった。

「そっか、何でもないのか」

美希はそう言ってパソコンの前でデスクワークを再開した。

美希がパソコンに戻ったのを見て紗織はポケットの中の物を確かめる。

「渡せなかった……」

二枚の映画の試写会の招待券だった。

「入信したいんですけど、お話を伺って大丈夫でしょうか」

「いま担当の者を呼びますので少々お待ち下さい」

仏見会の会館に入った隆之は受付の人が呼び出した男性と応接間で話しをすることになった。

「と、このように私共は仏の姿を仏像を介して見ることで悟りを得ることを目的としています」

資料を受け取ると、男は親切に説明してくれたが、内容自体は教壇のホームページにあるものと大差なかった。

「悟りを得ると、どのような事があるのでしょうか?」

「それは時が来れば解ることですよ。それで、結局入信なさいますか? 明石さん」

男はそう言って隆之の質問をはぐらかす。明石は隆之が今回のような仕事で使う偽名である。

「明日、もう一度伺います。返事はその時に。一応、名刺だけでも頂けますか?」

「解りました。こちらか私の名刺です」

名刺には“仏見会広報担当 東洋司”と記されていた。

隆之が会館を出て20分程で、電話が鳴った。ディスプレイに“笠原 直美”の名前で会館からの距離、周囲に人がいない事を確認し、電話に出る。

『会館の中はどうだった？“明石くん”？』

「直美さん！からかう為だけにかけた電話なら切りますよ！」

『ごめんごめん』

「はあ……。今日見た限りでは変なところは見当たりませんでした。そっちはどうでした？」

『こつちも変なところは見あたんかったよっ。じゃ、また明日っ』
電話が切れた。

「さて、今度はこつちだな」

隆之はポケットから名刺を取り出し携帯のアドレス帳から“成瀬美希”の番号を呼び出し電話をかける。

『もしもし』

「里見です。今日の所は特に収穫はありませんが、調べて欲しい事が一つ」『何だい？』

「“東 洋司”って人について調べて欲しいんですよ。字は東に西洋の洋を司るって書きます」

『ん、解った』

「お願いします。今日はそのまま家に帰りますんで、それじゃ」
隆之は電話を切った。

三話 潜入と推測

「おはようございます、明石さん。こちらにいらっしやっただということは、入信されるといふことですか？」

「ええ、そのつもりで今日は伺いました」

“明石 真”の偽名を名乗った隆之の仕事は、仏見会の信者のフリをして内部に侵入することだった。

すぐに入信の意志を示さず、次の日に意志を示したのは、その一日に“明石 真”の経歴等を調べる時間をワザと与え、相手の信用を得るためだった。ちなみに偽の経歴は美希が作成している。

「解りました。それでは」

その後、東から様々な説明を受けた。

集会があるのは毎週火曜日と木曜日の夕方と日曜日の朝であること、当然、この曜日は依頼人の三船が言っていた、団体が騒いでうるさい曜日と一致する。

月ごとに一定額の会費が必要であること、隆之が支払うのは来月分からでいいこと、これは事務所から必要経費として落ちるはずだ。最も、来月までいるかどうか怪しいのだが。

信仰対象である仏像のあるホールやその他の館内の施設に入る為には、会員証を見張りに見せる必要があること、会員証はすぐに渡せるとの事だった。

「法華宗に日蓮宗、天台宗に真言宗……他の宗派の本もあったな。教祖の本流し読んだ限りでは話しどなりに新興の宗派みただけ、ここまで他宗派の本が多いのは気になるな。」

会員証で信者だけが入れられる館内施設に入った隆之は、資料室で本の内容を調べていた。

「結構排他的なイメージだとばかり思ったけどな」

資料室には団体の過去に出版した書物や他の仏教の宗派の関連書物が存在していた。

「後はあそこだけだが……」

隆之がそう言うって視線を向けた先には、“関係者以外立ち入り禁止”の張り紙の張られたドアだった。何でも希少価値の高い資料を管理しているとの事だが

「あからさまに怪しいよな、これ」

隆之はとりあえずそのドアの事を心に留め、別の部屋へ向かうことにした。

「ここは何もなさげだな」

次に隆之が向かったのは、信仰対象である仏像のあるホールだった。

仏像自体は三体あるが、どれがどんな仏像であるか隆之は知らないし、知るつもりもなかった。

今の隆之が知るべきは仏見会の実態であり、行すべきは依頼人の為に騒音被害や非合法行為の証拠を探す事だ。

「夜の9時には会館を出なきゃならないんだよな」

だが、依頼人の騒音被害の報告も美希の調べたインターネットでの仏見会の騒音被害の書き込みも、それが起きるのは深夜帯であった。つまり

「夜中に入り込むしかないかな」

隆之はそう呟き、とりあえずは信者からの話しを聞く事にした。

「素晴らしい団体ですね。」

「自分を救ってくれました」

「入信してから心が洗われるようです」

などが隆之が信者に聞いた仏見会についての感想だった。

結局、隆之は証拠を掴むことが出来なかった。

「誉める意見ばかりだけど、信者は一世信者ばかりだしなー」

仏見会は宗教団体としての歴史が浅く、二世信者の人数が少なく、いても若い年齢の子供達だけだった。

出来ることなら、団体と距離を置くが、何らかの事情で団体を離れることが出来ない二世信者からの言葉を会館の外で聞きたいのだが、今回のケースは不可能だった。

「今回は一世信者から話しを聞ける人を探すしかないかな」

今日は帰ろう。隆之はそう呟き、携帯のメールを打ち始めた。

「何も怪しい動きないよな？」

「そだね」

誠一と直美は会館近くの駐車場を借り、車の中で会館に入出入りする人と、会館の周囲を交代で調べていて、今は交代の時間だった。

結局、こちらも何も怪しい所は無かった。

「ま、しょうがないよっ。あたし達がここにいるのはさ、隆之に何かあった時に助けに行く為でしょ？ま、だからってこの仕事を雑にやっちゃダメだけどさっ」

「確かにそうだが……」

そんな話をしているときに、誠一と直美の携帯が鳴った。

「隆之君からか」

「向こうも何もなかったみたいねっ。あたし達も帰ろっか」

「だな、送っていくよ」

「あんがとっ！誠一」

「雅さんに帰りますでメールしといてくれるか？」

誠一はそう言って車を走らせ始めた。直美を送っていった後、事

務所の車は誠一が自分のアパートに止めて置けばいいので、そのまま誠一は帰る事が出来る。

暫くは自分も直美車の中の生活かな、誠一はふとそんな事を考えた。

「やっぱり情報はなしか」

美希は自分のパソコンに向かい、隆之に頼まれていた、“東洋司”について調べたが、特に目立った情報はなかった。

「電話入れときましょ」

美希は携帯を手に取り、アドレス帳から“里見 隆之”の名前を呼び出し、電話をかける。

『もしもし』

「隆之君、今話しても大丈夫？」

『大丈夫です。どうしたんですか？』

「昨日頼まれた東つてひとのことなんだけど、私が調べる限りでは妙な点は無かったわ」

『解りました。誠一さん達は？』

「まだ調査中だつて、まだ目立った事もないつてさ」

『解りました。それじゃ今日は帰ります』

「解りました。雅にも伝えといてね。」

「もうメールしてあります」

「そっか、じゃ、頑張つてね」

美希はそう言つて電話を切った。

「さて、私も頑張らないとね」

美希は再びパソコンに向かい、仕事を再開した。

美希が隆之に電話しているとき、紗織は事務所の掃除の後片付けをしながらその光景を見ていた。

結局、昨日は隆之に試写会の招待券を渡せず、隆之に連絡をするときに誘ってみようかと思っていたが、その連絡も、結局美希が入れてしまった。

深いため息をつき、掃除の後片付けを終わらせた紗織は用具をしまい、自分の机から鞆を取って、帰り支度を整える。

「美希さん」

「あ、帰るの？」

「はい、失礼します」

紗織はそう言い、事務所を出た後、携帯を取り出し電話をかけようとしたが、

「今は迷惑かな……」

そう呟き、携帯を鞆にしまう。鞆に入れたままの招待券が、何故か重く感じられた。

「雅さん、こっちのファイルにも怪しいのはないです」

「そう、じゃあそれも戻しておいて」

朋希と雅は事務所の資料室で神仙教絡みの事件のファイルを読んでいた。

「でも何で今更神仙教について調べるんですか？ 仏見会は神仙教と何の関係も無い団体の筈でしょう？」

「私と篠塚が調べてる例の薬が流れた可能性があるのよ」

「例の薬って、神仙教が作ったって新型のドラッグでしょう？ 何でそんなもん追ってるんです？」

「宗教屋は信者に神の姿を見せてやりたいのよ。そうすれば求心力が高まるからね。あの薬はそれにうってつけなのよ」

「前の団体も持ってましたけど、神仙教とは何の関係も無かったじ

やないですか」

「ま、一応よ」

雅はそう言いながらサイレントマナーにしていた携帯をチェックし、隆之達からのメールに『解りました』と返信してから再び資料を読み始めた。

ま、やることはやりますか、朋希はそう心中に弦き、自身も資料に向かい直った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5793/>

シークレット・アイ

2010年10月29日11時24分発行